

## 中学校国語科書写「行書」指導における教育機器活用の一考察

—— VTRによる教材化の試み ——

西村 久美 \*

中学校国語科書写の行書指導においては、特に筆による「動き」の指導が重要であるといわれる。ただ単に筆の「動き」の結果が表われた行書の特徴を視覚的に捉えるだけでなく、行書の基礎的な書き方を具体的に理解させ、筆の弾力による動きの原理を生徒自身に内的に体系化させた上で、技能の定着化を図る指導があれば、さらに効果が上がるものと思われる。そのため本校の一年生の行書教材に即したVTRを作製し、授業の指導過程において、指導者の直接示範と関連させて活用し、指導効果をあげようとするものである。

### はじめに

中学校国語科「表現」の領域に位置づけられている書写指導は、指導要領にその目標・内容・時間数が明記されているにもかかわらず、全国的に低滞し、形骸化している旨の話題が、全書研<sup>1)</sup>や他の研究会においても耳にすることが多くなった。現行の指導要領は小学校・中学校・高等学校における書写・書道教育が一貫して行われることを、目指して制定されたはずである。しかし、現状は、改訂の趣旨に齟齬をきたしつつあり、小学校とともに、中学校の書写指導が存廢の危機にさらされていることを憂慮している書教育関係者も出ている。<sup>2)</sup>

私自身、昭和58年度の教育実習で本校の一年生に、中学校国語科書写の中心的内容である「行書」の全単元を教官の指導のもとに担当する機会を得、さらに幸いなことに、59年4月からは書写指導の

非常勤講師として採用いただき、実習時と同様一年生の指導に当たっており、現場の実態も知ることができた。

本校生徒の書写に関する実態をふまえ、実習時の共同教材研究の過程で深められた行書指導への教育機器の導入に工夫を加え、行書に不可欠な「筆脈」を生みだす用筆・運筆に関する技能習得のために、特にVTRの作製とそれを活用しての効果的な指導法の改善を試みた。

### 生徒の書写学習の実態

中学生になると、知識や情報の量が増加し、日常生活や学習の中で使用する文字量も次第に増えてくる。そのため、速書きの必要から筆順が無視され、無理な点画の連続やくずし方をしたり、あるいは現在社会的問題になりつつある、いわゆるマンガ文字の流行など、本校においても文字に関

\* 岩手大学教育学部附属中学校非常勤講師

する多くの問題をかかえている。

毛筆書写においては、小学校での楷書学習を通して、一点一画を正しい用筆で書くことや、字形を整えて書く能力は一応身につけられている。しかしながら楷書とひらがなの学習の統合、発展であり、中学校国語科書写の中核となっている「易しい行書」に関連させて分析してみると、一画ごとに墨をつけて書いたり、筆のおろし方が不充分だったり、終筆で力を入れすぎため鋒先が開いたままの状態であったり、潤濁のない書き方をしている。それ故、一字を筆脈を通して書くことや、ひらがなの用筆・運筆が体得されていないという実態も多く見られる。

そのため本校の書写指導においては、行書単元の指導以前に小学校の字形に関する既習内容の習熟を図るとともに、行書学習への導入として、楷書の筆順、許容体、筆脈、抑揚、潤濁に関する指導と、ひらがなの用筆と運筆についての指導に重点を置いている。

### 行書指導における教育機器活用の必要性

週一時間という限られた書写の授業時数と、前述のような生徒の多様な能力差をかかえた本校の書写指導の実態を考える時、より効果的な指導方法の工夫が必須である。実技を伴う教科においては、生徒の練習時間の確保と、指導者による個別指導が重要であるといわれる。<sup>3)</sup> そうであればこそいかに効率的かつ合理的な全体指導が可能であるかを、追求しなければならない。その点、教材の具体化をはかり、生徒の理解を容易にし、自主的に問題解決の学習に取り組ませることの出来る効果的な方法といえば、教育機器の導入を積極的に取り入れた指導ということになる。

一般に書写の指導で活用している主な教育機器をあげてみると、

1. スライド映写機
2. 実物幻灯器

3. OHP
  4. 映写機
  5. VTR
- 等である。<sup>3)</sup>

この中で現在私が授業の際に利用しているOHPと、VTRの活用法についてふれてみる。

### OHP (オーバーヘッド・プロジェクター)

#### (1) 掛図的な活用

説明のために、手書きしたものや、教科書そのものの教材、示範作品、写真、図版などを複写し、TP化<sup>4)</sup>して用い、画像を静止状態で拡大して投影する。

#### (2) 示範板的な活用

ステージの上でシートに直接墨書するか、すりガラスの裏面に毛筆で水書し、文字全体や部分の示範をする。

#### (3) 模型合成的な活用

字形の分析や文字の配列をいくつかの部分に分けてシート化しておき、補助線を入れたり色を変えたりしたものを重ねて合成像を示していく重ね合わせ式や、さらに細分化したシートを徐々に現わしていく畳みこみ式で投影する。<sup>5)</sup>

### VTR (ビデオテープレコーダー)

- (1) テレビ放送や他のVTRを録画、または集録しておき、指導計画の中にくみこみ、必要なときに視聴させる。
- (2) 生徒が書いている場面を撮影し、その場ですぐに再生し視聴する。
- (3) 予め指導者の示範過程を録画しておき、目的に応じて直接示範を補完しながら再生視聴する。
- (4) 再生視聴中に任意の場で一時停止、ストップ、スローモーション画像としてみせる。<sup>3)</sup>

これらの利用法をふまえ、特に行書指導においてはその中心課題である筆脈を生む基本要素の「動き」の原理を、生徒に科学的に理論的にとら

えさせるための最も効果的な方法を採用しなければならぬ。

これについての研究は、昨年度の教育実習における行書指導の教材研究の段階から始まった。それまでの教育実習の授業では、毛筆の動きを視覚的にとらえさせる方法としては、すりガラス使用のOHPを示範板的に活用<sup>9)</sup>する方法であった。生徒は興味や関心をもってスクリーンに大きく写し出され、点画の太さや運筆の速さの変化を伴いながら示範される行書を見ることできる。しかし、OHPを置く高さによっては、投映レンズがスクリーンを遮ったり、指導者の姿で影が出たり、座席によっては死角ができる事などの問題点が生じた。またスクリーンに写し出される行書と同時に、その過程における指導者の手の動きと筆そのものの状態も直接見せることが望ましいにもかかわらずOHPでは、紙面に対する毛筆の弾力的な上下動を写すには限界があった。そこでその限界をカバーする機器としてVTRの併用を試みた。ちょうど「易しい行書」の第三の教材であり、前時の運筆の遅速緩急の指導内容を受けて、抑揚による筆鋒の弾力を利用した開閉を理解させようという目標であったので、毛筆の具体的な「動き」が体得され、効果的であったと思われる。

### 教育実習における指導実践

昨年度の教育実習における、行書単元の指導実践を略記する。

一年生対象の本単元では、導入で楷書と比較して視覚的に理解できる行書の特徴を項目的に理解させたうえ、教材の「大木」では終筆の変化、気脈の貫通について、「文明」では点画の連続と運筆の遅速について、「秋空」では点画の省略と抑揚について理解させるとともに、筆脈を通して書く練習をさせた。「紅葉」では筆順の変化を理解させ、行書のまとめとしての作品化を意識して書かせ、鑑賞的な面にもふれさせた。さらに「行雲流水」では、文化祭出品作品として仕上げることとし、行書学習の応用・発展教材と位置づけた。作品のイメージを豊かにするため、古典の鑑賞を取り入れ、個性を生かし、行書を書く楽しさを味わい、意欲的に作品にとりくめるよう配慮した。

「行書」単元学習の教材系統表と指導計画及び活用した教育機器を関連させて図示しておく。(表1)次にOHPや新たに作製を試みたVTRの活用例として、応用教材の「行雲流水」(2時間相当)の指導展開例を示す。(表2)



OHPを活用した授業風景

表1 教材系統表及び指導計画

	単 体	左 右	上 下	終筆の 変化	筆の表 裏	つき返 し	点画の 連続	点画の 省略	筆順の 変化	部 分	指 導 時 間
大	大			大						大	1
木	木			木						木	
文	文			文						文	1
明	明			明	月	月				明	
秋	秋			秋	禾	禾	禾			秋	1
空	空			空	工	工				空	
紅	紅			紅	工	工	工	工		紅	2
葉	葉			葉	世	世				葉	
行	行			行						行	2
雲	雲			雲	雲	雲				雲	
流	流			流	流	流				流	
水	水			水	水	水				水	

使教育  
用育し機  
た器

OHP

OHP

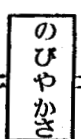
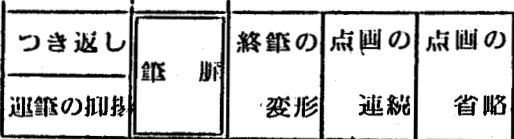
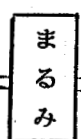
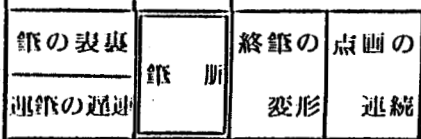
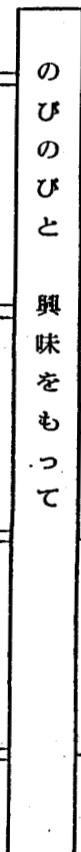
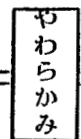
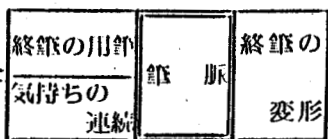
OHP  
VTR

OHP  
VTR

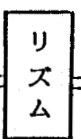
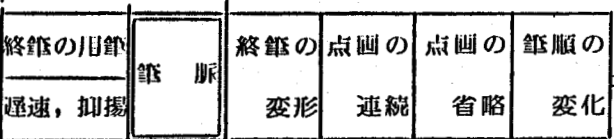
OHP  
VTR

用筆 全体 行書の  
速筆 目標 特徴

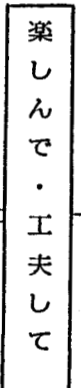
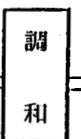
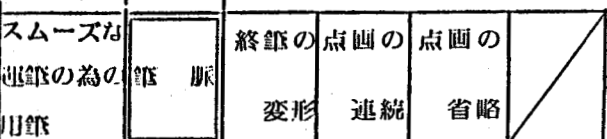
全体の  
感じ 気持ち



行書(硬筆)基本の習熟  
<課題>①



行書(硬筆)まとめと定着  
<課題>②



理解目標

技能目標

情意目標

表2

学 習 指 導 案

書 道 科

9 番

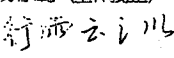
指 導 者

西 村 久 美

1. 日 時 昭和58年10月4日(火) 5校時
2. 対 象 学 級 岩手大学教育学部附属中学校 1年 B組 (男22名・女23名。計45名)
3. 主 題 行 書 の 学 習 「行雲流水」(1時間め)
4. 本時の目標
  - ・行書のまとめとして、行書の特徴を理解し、工夫して書くことができる。
  - ・文化祭出品作品として意欲的にとりくむ

5. 指導過程の概要

段階	指導事項	教師の活動	予想される生徒の活動	時間	教具・教材	指導上の留意事項
導 入	1、学習環境の整備	・学習用具の準備・確認 ・学習意欲喚起のための雰囲気造成	・準備をする	5	6切の画仙  まとめた紙板書  昨年作品	用具の準備は ・硯に墨を出しておく ・筆に墨を含ませておく  今までやったものを発揮できる環境づくり  個性となつてあらわれる
	2、前時学習内容の想起	行書の特徴 前時の学習カードを利用して知的理解をはかる	・曲線的 ・点画の変化 ・点画の連続 ・点画の省略 ・筆順の変化  筆脈 抑揚<遅速緩急>リズム 潤滑  発表する			
	3、本時題材の確認	・予告どおり行書のまとめとして文化祭出品として6切画仙に4文字「行雲流水」と書くことを確認 ・仕上り状態の昨年度の作品をみせる	確認する 意欲的にとりくむものとする			
展 開	4、行書課題の確認	「行雲流水」を工夫して行書で草稿つくってきたか確認する	前時課題より工夫して草稿をつくってくる	10	6切画仙	参考 前時課題に出した硬筆(行書)を思い出させ生かして書かせる ・硬筆ノート ・教科書 P23、39、40  試書した作品 行書になつていない なければならない 四字の調和を考え 折って書いてよい 机の使い方を配慮する(たてに使わせる)
	5、課題批正	特徴が生きていないものやっこない生徒やさしい行書の範囲をこえているもの 教科書で確認する	草稿を教科書で確認する			
	6、試書	草稿をもとにして毛筆で工夫して「行雲流水」と書くことを指示	工夫して行書で「行雲流水」と試書する			
	7、行書「雲」提示	「雲」一字をとりあげていろいろな表現があることを確認	行書には巾広い表現のあることを知る			

開 閉	8、古典鑑賞	古典の説明 代表的古典提示 { 1 王羲之—蘭亭叙 2 顔真卿—祭姪稿 3 褚遂良—枯樹賦 3つのテーマに則した作例 1 正統的なもの (羲之的) 2 重厚なもの (顔真卿的) 3 躍動的なもの (褚遂良的)			OHP 1) 2) 古典提示 3)	今までやってきた 行書と古典との関連 づける 作例の字形は統一 する 字形—骨格である 工夫してきた字形 はやさしい行書の 範囲内全体との調和 の中で考慮する	
	9、鑑賞の発表	1) 2) それぞれからうける 3) 感じを発表させる	鑑賞したことを発表する (生徒の言葉で) 1) のびやか、ゆったり、やさしい 2) 堂々としている、力強い 激しい、重い 3) すっきり、するどい、躍動的、壮快				
	10、試書作品との 関連はかる	1~3より自分の表現した もの選んで試書と照応 させる どの表現にするか、方向が 決まったかを確認する	書きたいもの≠試書作品 異同ある どの表現にするか決定する		10	選択することが、まず 個性の第一歩と考える もっと練習しなければ ならない点を確認 させる	
	11、練習	半紙に部分練習させる	自分が工夫してきたものをもとに して作例を参考にして新しくとり 入れる所を中心に部分練習をする		5	試書した6切の画仙 と同じ紙巾に折って 2字ずつ2組くらい 練習させる 6切の画仙=半紙たて 2枚つき	
	12、問題点確認	字形の確認 連続・省略部分の確認 	字形、連続と省略部分を確認する		OHP	字形は統一する	
	13、示 範	部分示範 (全体批評) 			OHP とりのこ	部分だけ示範 ex)  ここだけ加える ようにしたもの 準備する	
	14、空 書	リズムに注意して空書する	全体の流れ、リズムに注意して 空書する		2	教師—左手で空書 手のひらきとし を筆の開閉に関連 させて動きを 大きく	
	15、練 習	6切の画仙に四文字の調 和よく練習させる 2組のうちよい方に氏名 入れさせる	空書での動きを生かして四字の 調和に気をつけながら練習する		10	個人差を考慮し机間 巡視しながら早く書 (授業のはじいた生徒には紙を渡 めに配布す み)	
	16、本時学習内容の まとめ	行書の特徴を生かして 工夫して書いたことを確 認する	行書の特徴を想起しながら工夫 して書いた自分の作品を評価す る			学習カード	リズム・動き
	17、次時予告	次時は清書することを言 う 各自それまで練習してく るよう指示する	次時にむけて意欲をもつ				↓ 個性として表れる 練習のちがいがい
	18、あいさつ 提出	本時の 作品を集める			3		

学 習 指 導 案

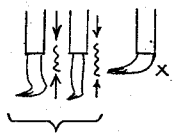
書道科

9 番

指導者

西村久美

1. 日 時 昭和58年10月5日(水) 5 校時
2. 対象学級 岩手大学教育学部附属中学校 1年 B組 (男22名・女23名。計45名)
3. 主 題 行書の学習「行雲流水」(2時間め)
4. 本時の目標
  - ・行書の特徴を理解し、工夫して書くことができる
  - ・たて書き4字を調和よく書くことができる
  - ・文化祭出品作品として意欲的にとりくむ
5. 指導過程の概要

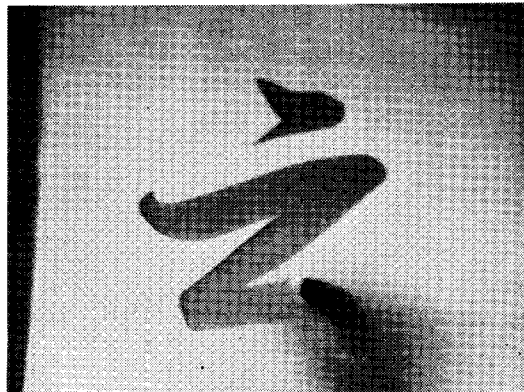
段階	指導事項	教師の活動	予想される生徒の活動	時間	教具・教材	指導上の留意事項
導 入	1、学習環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習用具の準備確認</li> <li>・学習意欲喚起のための雰囲気をつくりだす</li> </ul>	学習用具の準備		OHP } 用意 VTR } 磁石 } 6 切面仙配付	<ul style="list-style-type: none"> <li>・硯に墨を出しておく</li> <li>・筆に墨を含ませておく</li> <li>・今まで学習したことを発揮できる環境づくり</li> </ul>
	2、前時学習内容の想起	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時提出作品返却</li> <li>・行書の特徴ふまえて「行雲流水」と工夫して書いたことを確認</li> <li>・OHPで「行雲流水」の一字一字を古典で多様に表現されていることを見せる</li> <li>・前時提出作品より3つのテーマに即しているものを提示し、鑑賞させる</li> <li>・前時作例の提示</li> </ul>	自分の欠点を把握する  多様な書き方の確認  生徒作品を鑑賞する	3	前時作品  OHP 古典より 行雲流水  OHP	批評の観点 字形で誤ったくずし方  前時使用古典 ①蘭亭叙 ②祭姪稿 ③枯樹賦
	3、問題点把握	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体的欠点をとらえる</li> <li>・4字の調和よい書き方</li> <li>・やさしい行書の範囲での字形のとらえ方</li> </ul>	批評する 自己批評としてとりいれ 自分の作品に赤ペンで印つける		赤ペン	ex)
	4、本時学習課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時までに学習した行書の特徴を生かして、やさしい行書の範囲をこえない程度で工夫して書くこと</li> <li>・たて4文字を調和よく仕上げること</li> <li>・2点を本時課題とする</li> </ul>	本時課題を把握する	2		水 水
展 開	5、(部分) 示範	部分示範  行 雲 流 水  生徒の工夫したものをとりあげる 1. 水才 2. 水	VTR (教師の示範) で理解する  問題点は前時試書作品に赤ペンでチェックする		VTR	自作VTR  抑揚説明 ex) ねこのジャンプ    弾力がきいている状態



段階	指導事項	教師の活動	予想される生徒の活動	時間	教具・教材	指導上の留意事項
	6、一次練習	部分練習させる	自分の問題点チェックしたところを部分練習する	5	半紙に OHP	終了時間の指示  紙のおり方
	7、全体批正	全体の調和に気をつけさせる ・4字の調和 ・文字の大小 ・バランス ・配置 4字の配置 氏名の配置	各自注意点を確認する			
	8、学習カード確認	学習カードを確認することにより本時学習課題を再確認させる	本時学習課題の再確認			
	9、二次練習	半紙に2字ずつ1組に練習させる	仕上りを予想して練習する	15		
	10、清書	6切の画仙3枚	心をこめて清書する 氏名も記入する			
終	11、学習のまとめ	学習カードに記入させる	学習カードに記入する	5		時間のある時 生徒作品を掲示し鑑賞する
結	12、次時予告	本時で行書の学習終了次時からの予告をする				行書の特徴をとらえ 3つのテーマに即しているもの3点程度
	13、あいさつ提出					



実習時におけるビデオ撮影風景



授業で用いたビデオ

筆の抑揚を見せるため肩ごしに撮影したもの（雲）

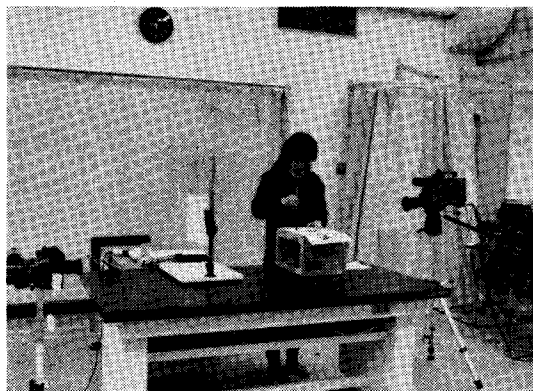
筆の開閉と遅速の変化をみせるため、すりガラスの裏面に映し出された文字を鏡で逆転させて撮影したもの

## VTRによる教材化の改善

書写の授業においてVTRを活用して、毛筆の実際の動きを具体的に拡大して見せることができたこと自体、生徒に感動を呼び、行書を書く時の筆脈に関する技能を身につけるための大きな手がかりとなったと思われる。

教育実習時の最初のVTR作製の方法は、教材を直接半紙に示範している状態をVTRに撮影した。画像を真横から撮ることによって、毛筆の抑揚（弾力による上下動）をとらえることが出来、頭上前方から撮ることによって、運筆の遅速の変化と筆脈が生みだされる状態が、生徒に鮮明にとらえられることがわかり、初めての試みは成功した。ところが、二つのVTRを別々に視聴させることから、真横から撮ったものは、文字が書かれていく過程と直結しての理解はされ難かった。やはり一つのVTRの再生画面に二つの要素<sup>7)</sup>が明示されないものかと検討した。

第二段階のVTR作製では、OHP示範の有効性を何とか生かせないものかと工夫してみた。OHPにおける示範者の手の影が筆路を妨げない方法をヒントに、文字を水書するすりガラスの裏面を撮影してみると、着想するに至った。しかし逆文字を書かない限り、文字は逆転したま<sup>さかさ</sup>まの状態となるので、鏡を利用して文字を再逆転させ、正常に戻したものを撮影することが可能になった。



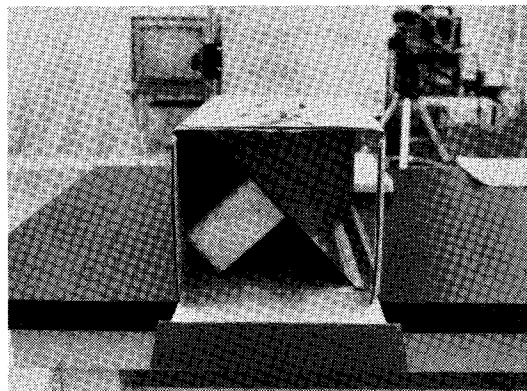
開発した装置を用いてのビデオ撮影風景

試行錯誤の末、曲がりなりにも作成されたVTRであったが、前述の如く授業で活用することができた。

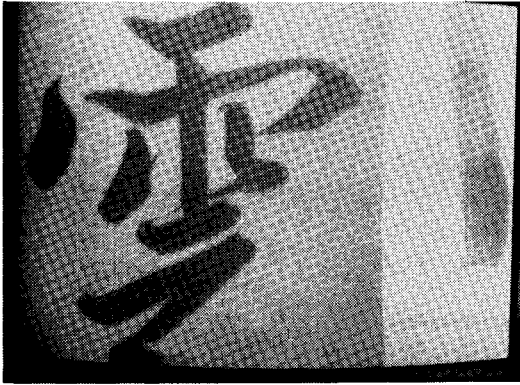
しかしながら、本年度になって本校の書写指導を担当しながら、実習時のVTR作製の過程を反省してみると、いくつかの問題点をかかえたままであることに気づいた。まず撮影装置のセットの仕方の研究不足で、すりガラスと鏡の角度やカメラの位置が不適切なため、文字を正常に撮影するためには文字を多少歪めて書かなければならない状態であった。また、実習時のように三人による共同作業<sup>8)</sup>であれば可能だが、そのセットが大がかりなうえ、機械操作に人手がかかることである。さらに、照明等の関係にも改善の余地があった。

そこで今回は、昨年度の原理を生かしながら、装置の工夫に重点を置き、当教育工学センターの藤原事務官の助言を得ながら改善を試みた。

第一点の文字の歪みをなくすことについては一眼レフカメラの構造と同様、水平なすりガラスの面に対して鏡を45°の角度に固定し、ビデオカメラを垂直に立てるという基本原理で解決した。照明に関してはライトの数を増やし、平均的に光を当てること、光漏れを防ぐために、ダンボール箱の中に鏡を斜め45°の状態にセットすることにした。箱の上部にはすりガラスを載せる窓と、前面には鏡に写し出された文字を撮影するためのビデオカメラ用の窓を作ったものである。



ダンボールに鏡をセットした装置



新しく撮影したビデオより（雲）

カメラにとらえられた画面は示範者の目の前に置かれたモニターテレビに映し出され、示範者はそれを見ながら書くことが出来るようになった。

この装置の開発により、文字の歪み、示範者の手の影の問題も解消され、装置自体もかなりコンパクトなものとなり、取り扱いも単純になった。また真横にもう一台のビデオカメラから筆の抑揚をとらえるようにセットし、2台のカメラの合成像も録画できる可能性が出てきた。

この方法により、行書の筆脈を生む運筆の遅速の変化と抑揚（上下動）とを、一つの画面で同時に視聴できるようになった。さらにすりガラスのかわりに透明のガラスを用い、その上に墨を通さない上質紙を置いて墨書すると、そのままの状態でも撮影できることも先日開発された。この方法を用いれば、普段半紙に墨で書くような状態で示範ができ、すりガラスより画像が鮮明に映るという利点を持っている。すりガラスに水筆で書くと、文字はライトの熱で消えることがあるが、一度書いた文字は消えることがなく、用紙の交換だけで手軽に連続して示範と撮影ができ、VTRによる教材化がより容易となった。

この最終的な撮影装置を用いて、行書単元の全教材をその時間の目標に即して作製した。今後この装置を用い、VTRによる教材化を進め、行書単元での活用にとどまらず、より効果的な書写指導を目指していきたいと思っている。また、来年

度からの教育実習の行書指導における一つの指導方法として、参考になればと願っている。

## おわりに

今回の実践を通して改善されたVTRの行書学習での活用により、生徒は毛筆の「動き」の原理をより具体的に理解し、内的に体系化することによって、技能として定着するようになると思う。それにより一字一筆で筆脈を切らず、しかもリズムをもって書けるようになり、また生徒自らが問題解決学習をする糸口になればと思う。具体化をもった一連の行書特有の毛筆の動きが体得できることによって、硬筆書写の基礎となり、さらに速書きできるという行書の特性も習熟させることによって定着させ、日常生活に生かすことができる。このことは中学校国語科書写の目標をも達成することでもある。

硬筆、毛筆の学習を通して書写能力を向上させその基礎的表現能力を培うことによって将来の高等学校、さらには一般社会における芸術としての書道につながる基礎が、自ずから養われていくことになる。<sup>9)</sup>

拙い2年間の指導実践の中で、多くの方々から指導いただき、中学校国語科書写指導における効果的指導法の改善が可能性を持ってきた。

しかし、教育は人間と人間との触れ合いの中で営まれるものであり、教育機器の限界を常に考慮しながら、自己の研鑽と指導の改善に努めなければならぬと自覚している。

書教育をとりまく現状は必ずしも望ましい方向ではないが、書教育の危機を払拭すべく、今後も努力していきたいと思っている。

最後に、本校の教育実習においてご指導いただいた国語科をはじめとする諸先生方、装置改善にあたりご助言下さった教育工学センターの藤原事務官に感謝いたします。

## 注・参考文献

- 1) 全国書写書道教育研究会
- 2) 書道美術新聞 123号 (1984)
- 3) 中学校国語指導資料 第三集 書写の学習指導 文部省 (1983)
- 4) プリンター (トラペン作製機) でトラペンアレンシー=フィルムシートに複写する。
- 5) 中学新書写 一年用 指導資料 中学新書写学習指導研究会 (1984)
- 6) 前述 (第3節 行書指導における教育機器活用の必要性 OHP(2)示範板的な活用)
- 7) 毛筆の抑揚 (弾力による上下動) と文字が書かれていく過程
- 8) 58年度の教育実習におけるビデオ開発の研究は、当時書道科四年次の浅沼真澄、鈴木賢子、西村久美の三人の協同研究であった。
- 9) 書写書道教育史資料 第一巻 加藤達成 (1984)

キーワード：書教育法，教育実習，中学校国語科書写，中学一年生，易しい行書，筆脈，OHP，VTR